



▲根本交流センターの遊戯室で一輪車を楽しむ女の子



▲根本交流センターの乳幼児室で遊ぶ男の子



▲太平児童センターのピヨピヨクラブの様子



▲北栄たじっこクラブで集中して絵を描く男の子



▲脇之島児童センターでお母さんと遊ぶ男の子

その2 安心して子育て・子育て

多治見市は子どもの健やかな育ちを支えます。

多 治見市は、子どもを中心に、親、子育て支援をする人や事業者、地域の「人財」、教育を支える教員などがひとの“わ”をつくり出すことで、子育てや子育ての環境をより一層高めるまちづくりをしています。

今回の「たじみ いいとこ こんなとこ」は、子どもの健全育成と働く保護者をサポートする「たじっこクラブ」と「児童館、児童センター」の取り組みを紹介します。

問 教育推進課 TEL23-5904 子ども支援課 TEL23-5958



教育委員会教育推進課 大澤昌世さん

たじっこクラブは子どもたちが安心できる場所



▲支援員の先生とかるたを楽しむ北栄小たじっこクラブの子どもたち

たじっこクラブ(以下、クラブ)とは、多治見市の学童保育クラブの名称です。放課後や土曜日などの休日に就労などの都合により保護者が日中家庭にいない子どもたちを預かっています。クラブは市内の13小学校に15カ所開設しています。共働きの世帯が増えてい

ることから、年々利用する児童も増え、現在は1,000人を超える児童の登録があります。

クラブは、放課後、子どもたちが安心して「ただいま!」と言って学校から帰り、仲間と共に学んだり遊んだりできる場所を目指しています。1年生から6年生までと一緒に放課後を過ごすことで、一緒に遊んだりすることはもちろん、上級生が下級生に学習や遊びを教えたりする姿が見られます。また、集団の中のルールやマナーについて学んだり、子ども同士や支えてくれる大人との関わり方に気付ける場としても大切な役割を果たしています。

クラブの現場では市内に7人の学童保育コーディネーターを配置し、学校、クラブ、保護者、地域との連携を支えています。支援員は、子どもたちの学びや遊びを支え、子どもたちが安全に活動を行えるように気を配っています。

教育委員会は、保護者の子育てを支援しつつ、保護者の皆さんと一緒に子どもたちの成長を支えています。



▲学校の宿題は最初に取り組みます



私はクラブと学校、家庭、地域のパイプ役です。

多治見のたじっこクラブ

子どもたちが安心・安全に放課後を過ごすことで親が安心して働くことができる。これが学童保育の第一の目的です。そこに、学習支援や地域の大人たちとの関わりを強化したのが今のたじっこクラブ（以下、「クラブ」）の姿です。私は北栄小たじっこクラブに席を置き、コーディネーターという立場で、クラブと学校、家庭、地域のパイプ役をしています。

学習支援と地域との関わり

北栄小たじっこクラブでは、できる限りクラブで宿題を終わらせるよう指導しています。支援員は子どもたちが宿題をするのを根気よく見守り、親はクラブに任せきりにせず、ちゃんと子どもに関わるようにします。また、



福井 寛^{ひろし}さん
学童保育コーディネーター

地域に帰らないクラブの子どもたちは、近所のおじさんやおばさんと話す機会が少なくなりました。できるだけ、地域の大人たちとの関わりを持たせ、人の気持ちが分かる子になってほしいと願っています。

子どもたちの成長を見守る

現在、北栄小たじっこクラブには97人の児童が通っています。子ども同士の言い合いやけんかは絶えませんが、支援員はすぐに仲裁に入らず見守ります。ほとんどの場合、子ども同士で解決できますし、子どものストレスもたまりません。子どもたちは学校や家庭とは違う顔をここで見せます。これからは子どもたちの成長を支援員と共に温かく見守っていききたいです。

子どもは、クラブが楽しくて仕方ないようです。

校内に移動しより安心に

4年生の息子と1年生の娘を共栄たじっこクラブ（以下、「クラブ」）に通わせています。平成28年4月に民間法人が運営するようになってから、場所が校外から共栄小学校体育館の2階へ移動し、より安心になると同時に、学校の運動場や共栄公園も使えるようになって活動しやすくなりました。また、保護者会や行事が以前と比べ少なくなり、働いていて時間がなかなか取れない私のような保護者には助かっています。

家族のようなクラブ

子どもたちはクラブへ行くのが楽しくて仕方ないようです。行ってすぐ

に宿題をするルールになっていられるし、分からないところは聞けば支援員の先生が教えてくれます。高学年のお兄さん、お姉さんは低学年の子たちの面倒をよく見て一緒に遊んでくれます。兄弟が少ない家庭が多いので、ここでの経験は貴重です。

人と関わり子どもは成長する

子どもが小学校に入学する時、私は仕事を辞める選択肢はありませんでした。子どもと一緒にいたいという思いもありますが、クラブでいろんな人と関わり成長する姿を見るたびに、これで良かったと思うことができます。



安藤由美子^{ゆみこ}さん
共栄小たじっこクラブ利用者

児童館・児童センターは、子どもたちの自主性・感受性・社会性を育てます。



案内人



大岩裕子さん

YUKO OIWA 子ども支援課 子育てコーディネーター

「先生こんにちは！」毎日元気いっぱいな子どもたちの声でにぎわう児童館・児童センターは、0歳から18歳までの子どもが利用できる「遊びの宝庫」です。専任の職員が地域の子どもたちに健全な遊びの指導を行います。子どもたちは遊びを通して、自主性・感受性・社会性を育てていきます。児童館の活動は、未就園児を対象とした「乳幼児クラブ」、「小学生クラブ」など多岐に渡ります。また施設内の活動のみならず、地域の実情に応じて地域交流活動も盛んに行われています。子育ての悩みや、子ども自身の悩みの相談窓口としての機能も果たしています。ぜひ近くの児童館に足を運んでみてください。



▲児童館・児童センターで同年代の友達と遊ぶ



▲子どもを通してお母さん同士が知り合うことも

脇之島児童センター

学校と連携して 子どもの成長を見守りたい。

私の実家はホワイトタウンなので、幼いころは脇之島児童センターをよく利用していました。一輪車クラブに入り友達と練習をしたり、児童センターに遊びに来た自分より年下の子の面倒をみたりしていました。ここで過ごすのが本当に楽しかったので、ほとんど毎日のように通いました。

大学で保育士の資格を取り、卒業後ここで働き始めました。保育園や幼稚園ではなく児童センターを選んだのは、「ここを訪れるいろんな年齢の子ともと接することができるのが魅力だったのと、身をもって児童センターの大切さを知っていたからです。」

私が働き出した時に小学校に入学してきた子たちが今年の3月に卒業しました。招待され参加した卒業式では感

市内の保育園で保育士として約20年間勤務した実績があります。子どもと家族に寄り添うこの仕事に誇りを持っていきます。



動して号泣してしまいました。同じく、お母さんと一緒に来ていた0歳の子たちが今年小学校に入学しました。ずっと見守ってきた子どもたちの成長は何よりうれしいです。子どもたちにとっても、ここは第二の「家」のような存在です。中には「先生みたいな保育士になりたい」と言ってくれる子もいます。これからも、安心して子どもが帰る場所になれるよう、学校と連携して子どもの成長を見守りたいと思います。



脇之島児童センター館長
石崎 梓さん



私は、多治見市社会福祉協議会の職員として、長い間、発達支援センターなかよしで障がいを持った子どもを担当してきました。現在は、子ども育成課に席を置き、ここ（太平児童センター）のほか、南姫児童センターと滝呂児童センターで館長を務めています。

児童館・児童センターでは年齢を超えた交流ができます。例えば、子どもスタッフクラブという小学生対象のボランティア組織では、赤い羽根共同募金で街頭に立つほか、デイサービスセンターで高齢者の方と昔ながら

**子どもの自主性を尊重し
自信につなげてあげたい。**

太平児童センター



太平児童センター館長
水野千鶴子さん



▲子ども自ら遊び道具が片付けられる工夫をしている

の遊びをしたり、保育園や幼稚園へ行って紙芝居をしたりします。太平児童センターの子どもスタッフクラブには約20人の小学生が所属し、いかに訪問先の人たちに喜んでもらうかを自分たちで考えプランを立てています。こうした経験は子どもたちの自信につながり、今後の生き方にも影響を与えているようです。

多治見には各小学校区（13校区）に児童館・児童センターがあります。自分の住む地域に必ず児童館・児童センターがある状況は、他自治体に比べても恵まれていると言えます。家庭でも学校でもない自分の居場所をここで作ってほしいですね。

根本児童センター

**いつでも彼らの
居場所でありたい。**

根本交流センターがオープンして6年目を迎えました。根本交流センターは公民館と児童センターの機能を併せ持つ、子どもから大人まで多くの方に利用いただける活気あふれる複合施設です。その中で小学生のボランティア隊「ねもとボランティア☆キッズ」は、地域の大人から田植えや稲刈りなどの作業を教わり、仲間たちに伝える役割を担っています。こうした事業は、交流センターと青少年まちづくり市民会議と協力して行います。根本は地域全体で子どもを育てる環境が整っていて、住民の皆さんも積極的に子どもたちに関わってくれます。

昨年、NPO法人ぎふ[※]多胎ネットとの共催で、中学生が幼児（1〜3歳児）をマンツーマンで預かる保育体験を行いました。母親から引き離された赤ちゃんは、最初の30分ほどの間ひどく泣きますが、次第にその状況を受け入れて、抱っこをしてもらっている中学生に心を開いていきます。2時間後、別れの際に、中学生の方が心を通わせた子との別れに涙を流す姿もありました。託児体験を通して、彼らは、「命を預かる」とはどういうことかを知り、同時に、自分を育ててくれた親に感謝する



▲中学生による託児体験の様子

ようです。子どもが泣き止まないことを悩む若いお母さんたちが多いのは、少子化と核家族化の影響で、母親になるまで小

さい子と接する機会が少ないことが要因のひとつだと思います。そういった意味でも、中学生対象の託児体験事業はぜひ続けていきたいと思っています。

ボランティア活動や遊びを通してさまざまな経験をし、心を健やかに育てることが児童館・児童センターの役割だと思っています。そして、何よりいつでも彼らの居場所でありたいです。

※多胎家庭を支援する団体



根本交流センター所長
桑原真紀さん